

精力善用 自他共栄

—嘉納治五郎 幻の東京オリンピック—

(株)日本設備工業新聞社
代表取締役社長 高倉克也

オリンピック・パラリンピック東京大会が開催される2020年を迎えた。東京でのオリンピックは1964年以来56年ぶりとなる。歴史的には2回目と記録されるものの、本来なら1940年に史上初の東京オリンピックが開かれるはずだった。

講道館柔道の創始者である嘉納治五郎（1860-1938）は東京オリンピックの実現に並々ならぬ情熱を注いだ。IOC（国際オリンピック委員会）のアジア初の委員となり、欧米諸国の委員の反対を押し切って東京招致を成功に導く。

嘉納がIOCの委員を引き受けたのはスポーツを通じて青少年の心身を育成し、世界の平和に貢献するというオリビズムの精神に共鳴したからだ。欧米中心のオリンピックも東京開催によって世界的に開かれたものになると嘉納は期待していた。

だが過酷な時代の歯車は嘉納の夢とまったく逆の方向に動いていく。

「なあに」という精神

嘉納は現在の兵庫県神戸市で酒造業や廻船業を営む名家の三男として生まれた。母は嘉納家の長女で父が婿入りして廻船業を引き継いだ。

勉学に励み、育英義塾から官立東京開成学校を経て東京大学文学部に入学する。小柄で虚弱体質の嘉納は強くなりたくて願ひ、伝統のある柔術を学びはじめた。やがて経済界の巨頭・渋沢栄一の依頼で来日中のグラント前アメリカ大統領に演武を披露するほど上達する。

1882年、大学を卒業して現在の台東区東上野にある永昌寺の一角に道場を開設した。人の道を講じる場所として講道館と命名する。柔術各派の技を取り入れて身体のみならず精神を鍛える柔道を創造し、のちにスポーツ・教育全般の先駆者として体育の父と呼ばれるようになる。

教育者としての嘉納は学習院の教頭、旧制第五高等学校（熊本大学）校長、東京高等師範学校（筑波大学）校長などを歴任。五高では怪談物語の作者として有名な小泉八雲ことラフカディオ・ハーンが英語を教えていた。

約25年間にわたって校長を務めた東京高師にはのちに東急グループの創始者となる五島慶太が通っていた。五島は週に一度、湯島聖堂の講堂で行われる嘉納の倫理学の講義を受けた。柔道着を身にまとった嘉納は「人間には『なあに』という精神がいちばん必要だ。どんなことにぶつかっても『なあに、このくらい』というように考えろ」と繰り返し唱えた。嘉納を慕うようになった苦学生の五島は学費を稼ぐ方法を相談し、家庭教師の仕事を紹介してもらった。後年、五島は自叙伝で「英語とか歴史とかいろいろ教わったが、そんな



嘉納治五郎

ことはいまではどこに残っているかわからない。はっきり頭に残っているのは嘉納先生の『なあに』だけだ」と述懐している。

クーベルタンに請われて

わずか10人ほどで出発した講道館柔道は4年後に100人を超え、7年後に600人に膨らんだ。門弟は警視庁の柔術師範を投げとばし、評判を聴きつけた海軍兵学校は授業科目に柔道を導入する。

すでに海外も視野に入れていた嘉納は時代に先駆けて留学生を受け入れた。初歩的な日本語や学問の基礎を学べる弘文学院を設立し、約7000人に及ぶ中国人留学生が日本の大学や専門学校に進学できる道を切り拓く。卒業生として中国文学の革命的な旗手となる魯迅を輩出した。東京高師には中国人留学生のサッカーチームが結成されるなどスポーツによる国際交流も活発になる。

同時期にフランスでは古代オリンピックを近代オリンピックとして再興しようという気運が高まっていた。立役者となったのがクーベルタン男爵として知られるピエール・ド・クーベルタンだ。クーベルタンはパリの貴族の一家に生まれ、士官学校に進んだものの軍人にはならず、嘉納と同様に教育者の道を選んだ。

クーベルタンは1892年、スポーツ競技者連合の会議でオリンピックの復興を呼びかける。各国の賛同者によってIOCが設立され、1896年に近代オリンピックの第1回大会がギリシャのアテネで開かれた。

オリンピックという名称は古代オリンピックが開催されていたギリシャの聖地オリンピアに由来している。オリンピックに際しては互いに争っていたポリス=都市国家も休戦して参加しなければならなかった。いわゆる聖なる休戦がスポーツと平和の祭典というオリンピックのルーツになる。

1909年、嘉納はクーベルタンに請われてIOCのアジア初の委員に就任する。嘉納に白羽の矢が立ったのはクーベルタンが提唱するオリビズムと嘉納の思想が根本的に一致していたからだ。嘉納は精力善用・自他共栄を社会生活の基軸として掲げていた。精力善用ではスポーツで育んだ心身を社会のために活かし、自他共栄では自分だけで

はなく他者と共に進化していく。嘉納は「互いに助け合い、互いに譲り合い、我と他が共に栄えるということ」を何よりも願っていた。

世界の永遠の平和は

1911年、嘉納は大日本体育協会を立ち上げて会長に就任し、オリンピックに参加する準備を着々と進めていく。翌年、マラソン代表の金栗四三と短距離走代表の三島弥彦の学生ふたりを引き連れ、日本選手団の団長としてストックホルム大会に初参加した。しかしオリンピックは国際政治の激流に翻弄され、1916年に予定していたベルリン大会は第1次世界大戦によって中止された。

戦争終結後、オリンピックが復活して日本選手団もメダルを獲得するようになると日本での開催を望む国民の声が広がってきた。嘉納たち関係者は1940年の第12回大会に的を絞って東京招致をめざすことにした。

開催地として日本を含め10カ国が立候補し、イタリアのローマ、フィンランドのヘルシンキ、東京の3都市が最終選考に残った。東京に難色を示す欧米のIOC委員は日本が遠距離であることを強調し、船旅の時代に旅費や日数がかかりすぎると主張した。これに対して嘉納は「それならば日本からヨーロッパへの参加もまた遠距離であるから出場する必要はないということになる」と堂々と反論する。

武道の気合いにも通じる嘉納の執念によって東京招致は1936年のIOC総会で正式に決定する。嘉納は「世界の永遠の平和は彼を東洋化し、我を西洋化する努力によって初めて成立する」という信念に基づいて東京開催にこだわった。

1938年、エジプトのカイロで開かれたIOC総会の帰路、嘉納は氷川丸の船中で肺炎を患い、77歳で急逝する。遺体は氷詰めにされ、オリンピック旗に包まれた棺が横浜港で降ろされた。そのわずか2カ月後、日中戦争に投入していた日本政府は東京大会の開催権をIOCに返上してしまう。

幻と化した東京オリンピックは嘉納が亡くなって26年後にようやく実現する。嘉納が創始した柔道が正式な競技種目として初めて採用された。欧米諸国以外で誕生した唯一のスポーツだった。